



私は、「デューラーの「芝の草むら」に惹かれて植物画に興味を持ちました。

### 1. 参考書:「アルブレヒト・デューラーの芸術」 October 1, 1997 下村 耕史 (著)

- ドイツ・ルネサンス最高の芸術家デューラーが遺した作品や芸術論。
- デューラーが理想とした芸術の実現のための鍵となる様々な観念。
- 理論と実践の奥義を解明した著者 30 年の研鑽の労作。

### 2. アルブレヒト・デューラー

- 1471 年ドイツ南部のニュルンベルク、金細工職人の同名の父アルブレヒト・デューラーの第 3 子として生まれた。
  - 6 歳でラテン語学校に入学。1485 年、父のもとで金細工師になる修業をする。
  - 翌年、地元の画家に絵画を学んだのち、4 年間ライン河上流地方を遍歴し、木版下絵作家として働いた。
  - 帰郷後の 1494 年、23 歳のとき、父が決めたアグネス・フライと結婚。
  - その直後、単独でアルプスを越えてヴェネツィアへ旅行した。1495 年ニュルンベルクに戻って自身のアトリエを持ち、木版画作品を制作する。1497 年、最初の銅版画「4 人の魔女」を制作。
  - 翌年には木版画の連作「ヨハネ黙示録」全 15 点を自費で出版し、版画家としての名声を確立した。
  - 油彩画に水彩画、デッサンに木版画、銅版画と制作の幅を広げ、1500 年には「人体均衡論」の研究を始め、油彩画「1500 年の自画像」を描いた。
  - 1504 年、銅版画「アダムとイヴ」に取り組む。1505 年に再びヴェネツィアに向かい 1 年半滞在し、1507 年春に帰国。その年、油彩画「アダムとイヴ」を制作した。
- デューラーの後半生は宗教改革の暗い時代で、社会は不安と閉塞感に満ちていた。
- 1509 年ニュルンベルク城の門前に屋敷を購入(現在のデューラー・ハウス)し、油彩画「ヘラー祭壇画」を制作。
  - 1510 年代に入り版画制作が増えていく。絵画よりも儲けが多く、絵画に劣らない芸術とデューラーは考えていた。
  - 1512 年 41 歳、神聖ローマ皇帝マクシミリアン 1 世がニュルンベルクへ、これより帝室関係の仕事が始まる。
  - 1513 年、銅版画「騎士と死と悪魔」を制作。
  - 1514 年、銅版画「書斎の聖ヒエロニムス」「メレンコリア I」を創作する。
  - 1525 年最初の著書『測定法教則』を刊行する。
  - 1526 年油彩画「4 人の使徒」を制作し、ニュルンベルク市参事会に贈る。
  - 1527 年、著書『築城論』を刊行し、翌 1528 年 4 月 6 日、ニュルンベルクで没す。享年 56 歳。
  - 聖ヨハネ教会墓地に埋葬された後、『人体均衡論四書』が出版された。

### 3. kunst は natur に潜む

デューラーは画家を志す若者たちのために書いた芸術理論書『絵画論』で、美術にもっとも重要なことは「宗教・肖像・自然」であると書いている。

- 自然の中にこそ真実の kunst がある、という信念。
- 素直な気持ちで自然から学ぶことを指導。
- 自然から離れた自己流の kunst は必ず行き詰まる。

下村氏によると、

- 美術家は自然から自然らしい表現の基準となる原理を認識しなければならない。
- デューラーは美術家に求めるこの理論的な認識作用を“kunst”という語で表わす。
- 有名な『kunst は natur に潜む。それを抽(ひ)き出す者がそれを有(も)つ』という文は、理論的認識が自然から遊離したものに終わらず、自然の形態と質感の無限の多様さに、どこまでも対応しうるものでなければならないということを意味する。



### 4. デューラーの遺文集に頻出する、自然(natur)という語

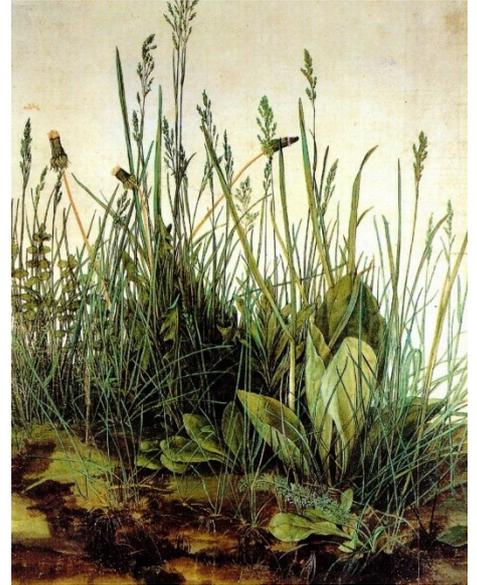
- ルネサンス期のイタリアの美術家は自然を手本としながらも細部を省略し、形や色彩を単純化することにより造形的効果を高めた。
- デューラーは、像全体を細部の集積とみなして、すべての細部を均等に扱うという特徴がある。
- natur の語義の中で、「類型と法則」の意味がデューラーの自然観を知るうえで重要。  
類型と法則:法則に貫かれた自然の秩序、神がその法則により自然を創造し、秩序付けているとの信仰。
- デューラーにとって「自然」という概念が大きな意義を担っている。神の被造物としての natur。  
「作品は形態の上でその生物に相応しく、正確であればあるほど、作品はそれだけよく見える。」

あるものをより優れて作ろうとしてはならない。なぜなら、人の能力は神の被造物に比べて無力だから」。自然は神の被造物として、法則を掲示する神聖な存在であるから、これを凌駕しようと思っはならない、という意味での natur。

## 5. Das Grosse Rasenstuck (芝の草むら、芝草)1503

オオバコ、セイヨウタンポポ、イネ科の植物の一本一本の細密画。草花に宿る強い生命のエネルギー、デューラーの明確で強い表現意図が感じられる絵。

- 自然の中にこそ真実の kunst がある、という信念。
- 素直な気持ちで自然から学ぶことを指導。
- 自然から離れた自己流の kunst は必ず行き詰まる、と言い切る。
- 人体におけるプロポーションの研究は、人体以外の動物や植物をも美しい形で描くという姿勢が身についたのだと考えられる。
- デューラー以前に、植物を独立した価値を持ったモチーフとして取り上げた画家はいなかった。デューラーほどリアリティにこだわった画家はいなかった。この作品は美術史上ユニークな地位を占めるに値する。
- 芝やイネ科の雑草、タンポポやアザミといった、どこにでもあるありふれた雑草である。それらの雑草が、十把一からげにではなく、ひとつひとつが個性を持ったユニークな存在として、敬意を以て描かれている。
- デューラーは植物のうちにも神の意志を感じたがゆえに、それをないがしろには描かなかったのだといえよう。
- 一般的によくある植物画とはちょっと違う。線のタッチや、構図の取り方、色彩表現等の表現方法はシンプルながら、正攻法で推したアカデミックの頂点とも言うべき絵。
- よくある花の絵のように見て美しいわけではないが、小宇宙を想わせるような存在感は圧倒的。草花が何かを語りかけてくるような気がする。
- 草花は確かに呼吸をしていて、人間のように様々な感情を持っているのではないかと思えてくる。
- おそらく草花に宿る強い生命のエネルギーや神秘を表現することだったのだろう。
- 一本一本の草花に神経が行き届き、血が通う姿は、生命のエネルギーを放射するかのようで、心を掻き立てる。



## 6. 色彩について: 1512-1513

- 画面の浮彫のような効果を、眼を欺くほど本当らしく見せるには、色彩によく通曉し、色を相互によく見極めながら彩色を施さなければならない。
- 赤や白に陰影を施すと、明暗のある全ての部分で光の屈折が生じ、眼に入る光線が湾曲したり屈折して浮彫効果が画面に生じる。
- 白い外套に陰付けするには黒い色だけを使えば非難されることはない。
- 明るい部分を明るくし過ぎるとその性質(art)から外れる。赤いものを彩色するには至る所が赤くなるようにしなくてはならない。美しい赤色が黒い色で汚されないようにせよ。
- 各々の色にはそれに調和する色で陰影を施すよう留意せよ。
- たとえば、黄色の陰は黄色の性質に留まるべきである。基本となる色よりも暗い黄色で陰影が施されねばならない。
- もし黄色が緑や青で濁らされれば、陰影は黄色の性質(art)から外れて黄色とはよばれず、種々に変化する色となる。
- 同じ面が曲がって光の向きが変わる部分では色は変化するのでそのように彩色しなければならない。平面であれば一色のままである。あるがままに描こうとすれば、どの色もその性質から逸脱してはならない。

